Fate/α

ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／α

【Ｎコード】
Ｎ９３１３Ｘ

【作者名】
ゆき

【あらすじ】
過去の聖杯戦争に巻き込まれてしまう
英霊として過去の人々との出会いやバトルなどが起こる

序章　終わりとはじまり

第５次聖杯戦争から２０年たった
親父から聞いたのは聖杯戦争はどんなものか聞いたことがあった。
手にした者の願いを叶えるという聖杯。
その聖杯を実現させる為、一つの儀式が行われようとしていた。
聖杯に選ばれた七人の魔術師（マスター）に、聖杯が選んだ七騎の使い魔（サーヴァント）を与える。

騎士　”セイバー”
槍兵　”ランサー”
弓兵　”アーチャー”
騎兵　”ライダー”
魔術師　”キャスター”
暗殺者　”アサシン”
狂戦士　”バーサーカー”

マスターはこの七つの役割（クラス）を被った使い魔一人と契約し、自らが聖杯に相応しい事を証明しなければならない。
マスターとなった者は他のマスターを消去して、自身こそ最強だと示さなければならないのだ。　杯を求める行いは、その全てが“聖杯戦争”と呼ばれると前に聞いたことを思い出した

久しぶりにその話をしてみる
「親父も聖杯戦争に参加したんだろ」
「あのころは、いきなり知識なしで参加したもんだな。まあ何とか生きていられて良かったと思えるだな。あれがなければいつまでも退屈な日々が続いていたんだと思えるがだが俺はあれがあったから

いいと思っている。」
「何でそう思ったんだ」親父に言ってみる
「まあ、あれがあったから今の俺がいる」と笑って言った
「なんだよそれ、それはまあいいか。聖杯戦争に参加していたのはどんな人達だったんだ」ちょっと質問をしてみる。
それくらいなら教えてもいいか「俺とイリヤと間桐と遠坂と先生と」ある名前を言う前にとてもいやな顔をした。
親父どうしたと聞いてみる。
「ああすまんこいつのことは嫌いなんだ教えないでいいか」
「まあいいか、それでどんなが起こったか教えろよ」
「長くなるけどいいか。」と真剣に言っていた
そのあと親父は自分がどんなことがあったがきちんと話してくれた。
自分がどう聖杯戦争にまきこまれた日常のことも話してくれた。
俺が思っていたよりもひどいものだった。
「そんなことがあったんだ」
ちょっと複雑な表情をみて親父は俺を見かねてか「久しぶりにやるか」
「よし今回は負けないぞ」と言って立ち上がった
「行くぞ親父」
「よし、来い」
二人同時に魔術を使う
「投影開始（トレース・オン）」

そのあとけっこうの時間がたった。
「親父まだ強いな」
「もうすぐ抜かれるぐらいだろう。」と笑っていた。
赤い宝石のペンダントを俺に投げた
「なんだよこれ」

「お守りだもっとけ」

そしてその夜は明けていく

その次の日姉にこの魔術の実験台になってくれという

俺はもちろん「いやだ」という姉は魔術を結構使える母さんの才能を受け継いでいる。

性格も一緒に受け継いでいる

だからいつもどうやっても絶対負ける。

まあいつものようになるだろうとしぶしぶついていく

今日の魔術はすごいことが起こると言っている。昔のことが見えるというのだ

「前の聖杯戦争のことも見えるのか」

「多分大丈夫だよ」

まあそれはすごいがしかし「失敗しないよな」と聞いてみる

「・・・大丈夫、絶対」

そういうときはいつも失敗する

まあ爆発ぐらいだったらいつもうけているから大丈夫だ

いくよと姉が言う

しばらくすると姉は「あれ、何も起こらないな」

良かった何も起こらなくてとほっとする。

「まあ今日はもういいからかたずけをお願いね」と言いながら出て

行く前に最後にふっと口が笑っていた。
しぶしぶ「わかった」という俺。
道具をかたずていくとなんか後ろから変な音がした。
「なんだこれ」と薬が入っている瓶を拾った。
「・・・・・・・・失敗した理由が分かった」そう口に出していたまあ自分だけ見るのも面白いかなと思って薬を大きな釜に入れる。他にもないかと見るがノートが置いてあった何か不安だっと思って読んでみようと思った

この魔術は過去に時間を跳躍していくということが書いてあった
「姉がつくったんかよこの魔術」
そのあとにメモがはさんであった
その儀式初めて使うから不安だけど大丈夫なはず　それと体は今のあなたじゃなくて未来のあなたの英霊としての姿になると思うよ多分　記憶はどうなるかわからないけど多分未来のことが少しはわかるはずだよと書いてあった

後入れてから5分ぐらいでなんか起こるということそれと失敗してもうらまないでね

「失敗したから帰るなんていつも言わないのに今日は機嫌がいいなって思っていたんだそっかそういうことか」
まあ外に出れば何とかなるだろうと思っていたが扉に鍵がかかっている

あれもう5分たつんじゃないと思った。

どうしようなんか釜から変なものが出ている何あれ変な煙も出てるしなんかにおいもするし意識飛びそうだ
あの釜を壊せばまだなんとかなるかもと思って
「投影開始（トレース・オン）」
あれ何も出ないぞと思っていたらそこで意識がなくなった

その後起きたのはビルの上だった。
そのあといつもと違うことにきずいた
見慣れている建物が新しいこととちょっと見たことがない建物があった
「今回は成功したようだな」
ちょっと体と声に違和感があったそれを確かめるために
「投影開始（トレース・オン）」
鏡を出したその鏡に映っていたのは見知らぬ男だった。

序章　終わりとはじまり（後書き）

初めて書かせてもらいます
ゆきともうします
初めて小説というものを書くので不安ですか
次回も読んでいただけたら嬉しいです
誤字脱字があったらすみません
あと主人公の名前が決まっていません衛宮・・誰かいい名前があったらお願いします

第壱話　夕方の出会い

見た目は親父に聞いたアーチャーみたいかなと思ったりもする
これが俺の英霊としての姿かそう思った

それより　まずは少しだけ状況を整理してみよう
そう思って記憶の中を探る
数分がたったそして少しだけわかったことがあった

自分の能力が強化されたこと
知らない知識があること
　ここが過去の冬木市で
そして姉の魔術によってここに召喚されたことがわかった

　だけど記憶にもやがかかっているのがある
なんで自分が英霊になったかは分からなかったが
まあ、大丈夫だろう　そう思っていた

ふっと近くに落ちているものがあった少しの宝石と赤い宝石のペンダント

「親父がくれたペンダントがなんでここにあるんだ」

そのあとため息を吐く
「やっぱり過去に来ちまった」
だが、まあなんとかなるだろうと思いこませる

それにしてもが赤い外套が目立ちすぎるな着替えるか

「投影開始（トレース・オン）」

適当に思った服を着る

「まあこれくらいなら大丈夫だろう」

ひとまず住む場所探すか

ここは新都側だな　住むなら橋の向こう側がいいだろう監視しやすいだろうし

その後ビルから降りて橋を越えた

どこに住むか決まってなかった

近くに幽霊屋敷とかが無かったか思い出してみる

遠坂邸の近くにあったなまあ行ってみるか

しばらく歩いていく

ここが幽霊屋敷か鍵はかかっていないな

まあ入ってみようそう思った

中はきれいな状態であった　電気も来ているようだ

まずは金銭的問題は宝石を少し売ればなんとかなるだろう

今がいつかそれだけ分かれば偵察の時役立つそう思った

まあ今は商店街で買い物でもしに行くか

鍵を投影して鍵をかければここには人は入らないか

商店街

宝石を換金して結構な額になった

そして今日が遠坂邸でアーチャーが召喚される日だと分かった

そのあと買い物を済ませた結構の荷物になったが意外と軽いものだ
英霊になったおかげだなそう思った

そのあと屋敷に戻った

今は6時ぐらいか今から料理でも作るか
今日は疲れているしかも遠坂邸のことも監視しないといけない

そして食べ終わった後少し睡眠をとった

午前1時前

「よし、行くか」そういった後
赤い外套の姿で顔には投影した仮面をつけている
顔を見られるのは困るからだ

午前1時

アーチャーの召喚に成功したみたいだ

まあ今日はここまでだなそう思って遠坂邸から立ち去る

屋敷に帰った

これで残りはセイバーだけだな召喚は確か2日後か

次の日
午前7時
今日は適当に町でも見に行くか

学校はアーチャーがいるから近ずくことはできないし
　新都の方がいいかな
行こう

ここがこの時代の新都か夜だったからわからなかったが
あまり変わらないそう思った

見張るなら一番高いビルがいいか
なんか遠くまで見えるんだがどうしてだろう
そう思った

今日は新都の見回りでもするか
そのあと見回ったが他のマスターはいないか
教会のとこには近寄らない方がいいな

昼食を済ました後　深山町の方に買い物をした

帰り道
歩いていたら前から女の人がぶつかった

女の人は倒れる
この人はなんか見たことがあったアルバムの中で
たしか桜さんだっけ

「すまない　大丈夫か」
手を差し出す

手を取って立ち上がる
「私こそ、ぶつかってしまってすいません」

足をすりむいている
けがをさせてしまってしまったようだ

「けがをさせてしまったようだ」

絆創膏とさっき買ったコーヒーを渡す

「絆創膏とコーヒーありがとうございます　お礼しないと」

「気にしないでいい」

今はもうすぐ5時か
「じゃあ、私は行くがまたあえればいいな」

「はいそうですね」

そう言って彼女と別れた

第壱話　夕方の出会い（後書き）

ちょっと長くなってしまいましたすいません
主人公の英霊としての姿はアーチャーに結構似ていると思ってくれて構いません
今回は桜が出てきましたが次回には結構物語が進むはずです

第弐話　始まりの夜

屋敷に戻った後

帰りに会った彼女のことを思い出す

あの人が桜さんか良い人みたいだ

そのあと料理を作ろうとする

その時　外になんかいる気配がした

なんだ

隠れようそう思った

外にいる人は鍵がかかっているそう思ったようで帰って行った

何者だろう管理人とかだろう

そのあと料理を作った

今日の夜、学校に行くかなどと考えた

家の手入れもしないといけないと思って掃除をする

その掃除中にあれここの奥に部屋があると思って

開けてみよう

中には一人の女の人がいた

眠っているようにしている腕がない片方
誰かがここでなにかがあったのだ
もしかして
このひとはマスターでサーヴァントを召喚したがサーヴァントか
他の何者かによって腕を切られてここに放置されたのではないかと
考えたがまさかそんなことはないと思った
医者に連れていくか

時間は午後7時

この人をこの聖杯戦争に関わりを持たないように出来るだけ遠い
医者へつれていくかそう思って
着替えるか
赤い外套を着て仮面をつけ彼女を医者へ連れて行った

医者だが闇医者の方だなぜ俺がそんなこと知っていたかは

前に町で迷った時なぜか闇医者の人と出会った
その時の地図をもらったから
記憶をたどりついた先は一軒の家　普通の家だ
チャイムを押す

「はいどちらですか」

「すまないがこの人を見てくれないか」

「患者さんか入ってきてください」

扉が開いて入っていく

「いらっしゃいこの人か患者か」

「はい、そうです」

「その部屋に寝かせてくれ」

そういったので彼女を寝かせる

医者は彼女を観察している

「命に別状はないがしばらくは目覚めないだろ」

時間を確かめる7時半帰らないといけない

「私のことは言わないで数日間この人を頼みます」そういって財布から数十万円を出す

「ああ、わかりました」

そして俺はこの家から出て学校の近くに向かう

その後学校の近くについて

遠坂とアーチャーが見える何か話をしているようだ

そのあとすぐにランサーが現れた

ランサーは目立つなとか思いながら遊び程度に弓で射てみよう

そう思って

「投影開始（トレース・オン）」

矢と弓を出す

適当に撃った矢ははずれた

こっちにはきずいてないし良かった

そしてアーチャーとランサーの戦いは始まった

すげえ戦いだな剣と槍でいい勝負してる

そのあと　弓道場から出てくる生徒がいる

あれは親父　この時代衛宮士郎か

ランサーがきずいたようだ

どうする助けるか　ここで助けたら未来が変わるが

助けたらおれは消えるかもしれん

どうする　焦って思考がはたらかない

どうすればいいかわからない

ここは見捨てるしかないのか

これはしかたない　すまない親父いや士郎

俺は最低だ

そのあと　やはり士郎は殺された

それを助けたのが遠坂だったわけかこのペンダントを使って

そのあとランサーは逃げたアーチャーは追いかけたようだな

そして屋敷に帰ってきた

死ぬとわかっていて人を見捨てた

生き返るということもわかっていても

もういちどだけセイバーが呼ばれるまでは見ているだけにしない

といけない

その後行くか

やはりランサーに襲われている

助けるわけにいけないがもうすぐ始まる

これで士郎が蔵を開いたら始まる　聖杯戦争が

そして開かれた

槍を防いだ金髪の騎士の少女は士郎に向かって

「サーヴァント・セイバー、召喚に従い参上した」

「――――問おう、貴方が、私のマスターか」

第弐話　始まりの夜（後書き）

物語を進めるつもりでしたがあまり進みませんでした
　やっとこれから物語は始まりともいえます
次回も読んでいただければうれしいです

第参話　交わす契約

セイバーはランサーと戦っている

セイバーが持っている武器は見えない剣

槍と剣ですごい火花を散らしている

ここで加勢するのもいいがめんどくさくなるのは避けるか

ランサーの槍に力が集まっているようだ

「刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）」

セイバーはぎりぎりかわしたがダメージを負ったようだ

「呪詛いや今のは因果の逆転か」

「かわしたな我が必殺の刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）を」

そのあとランサーは去って行った

どうする追うか

追おう

その後、ランサーを追った

なんか勢いで追ってきたけど　どうするか

そうだ生け捕りにしよう

「待て、ランサー」

「アーチャーに似ているが違う何者だ貴様」

「私のことなんて気にしないでいいだろう」

「投影開始（トレース・オン）」

今回は捕まえるだけだからマグダラの聖骸布でいいか

「なんだそれは」

ランサーが思うのも無理がない戦いにそんな道具を使うやつはいないだろう

「我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）」

よしランサーを　きれいにしばれた

ランサーが何を言っているが気にしないで

これからどうしよう

令呪を使われたら大変だな

マスターとの契約でもなくすか

短剣を出すこれで契約が切れるはずだ

『破戒すべき全ての符（ルール・ブレイカー）』

そういって短剣をランサーに刺す

短剣はすぐ消えた　やっぱり宝具を出すのはきついな

「何をした」

「お前とお前のマスターの契約をきっただけだが」

「なに」

「さっきの短剣の能力は魔力によって派生したすべてのものを初期化するものだ」

「俺の契約が切れて何が意味がある　お前の目的はなんだ」

ここで目的を教えることはできないがあることは言える

「聖杯戦争に参加するためだ」

「やはりそうか」

「本当は無理にでも契約できたのにしなかったその意味わかるか」

ランサーは話を聞いてくれている

「キチンと話して契約ができたらいいと思ったからだ」

「お前の条件はなんだ」

「私は契約としてお前を令呪で縛ったりしないそれでいいか」

「ああ、わかったそれでいいぜ」

そして契約の呪文を唱える

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ
繰り返すつどに五度、ただ満たされる時を破却する。」

「告げる。
汝の身は我が下に、わが命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

「誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者
汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ。
」

「我に従え！ならばこの命運、汝が剣に預けよう・・・！」

これで契約は成功だな

これでいいな
手には令呪がある

マグダラの聖骸布を解いた

「お前ってもともと誰がマスターだったんだ」

「俺が契約した奴は今のマスターによって腕を斬られたんだ」

腕が斬られた
今日の掃除をしていた時に見つけたやつも腕が斬られていた

関係ない奴だとは思えない
「そいつって女で男物のスーツ着ていなかったか」
「お前、そいつ知っているのか」
「今日　運良く見つけて医者に連れて行った」
「そうか」
ランサーそいつのこと気にしていたんだな良かった　助けて
「ランサーお前これからどうするんだ」
「特にはないが」
「じゃあ私の屋敷に来いそいつの荷物がある」
そうしてランサーと屋敷に戻って行った
そうしてその夜は明けて行った
その夜
セイバーとバーサーカーの戦いのことは気になったが
俺が出る時ではないと思いその夜は明けて行った

第参話　交わす契約（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9313x/

Fate/α

2011年11月1日02時19分発行